

〔翻 訳〕

『スペクテイター』 (39)

——第362号から第368号——

門 田 俊 夫

第362号 1712年4月25日（金曜日）

【スティール】

ワインへの愛着は賞賛の気持から生まれる。（ホラティウス）¹⁾

観察者殿

昨日、私は友人たち数人と、ブルック&ヘリアーにて、必要以上に杯を重ねてお祝いをしたのですが²⁾、今朝は非常に良好な健康状態でお茶をしました。そこで、私はこの良識ある市民に対する謝意から、一同を代表して、混ざり物のない本物のワインを輸入し、個々の家庭あるいは誠実な人々の集まるクラブの食卓に供されるとき、小売業者が混ぜ物をしてないように気を配っている人たちの真価を無視なさっておられる貴殿を告発することいたします。おいしく味わいたい場合にはいの一に大切な健康に関するこういったテーマを繰り返し語らない限り、観察者としての義務を果たせないものと考えます。したがって、貴殿は看板監督官に³⁾、巡回中には食品を扱う行商人を見かけたら、品物の入手先を尋ねるようにとの指示を出して、警戒の目を光らせるべきです。愉快で騒々しい思い出のあるコリー・モリー・パフ⁴⁾を見かけなくなってこの方、手押し車や馬とかロバが曳く荷車、要するに、移動市場で品物の販売がさかに行われています。歩兵の古着を着た小売商が、手押し車で腐ったレーズンやアーモンドやイチジクや干しブドウなどを売っている訳です。わずかに四分の一ペニー出したばかりで子供が食中毒に罹る可能性があるのです。そして、可哀相な両親が何の当てにもならない町医者に診てもらって1ギニー払うことになるのです⁵⁾。毒物がこれほど安く、医療がこんなに高くつくのですから、飲食物の検閲をして、このところ重宝がられている町医者のお世話にならないようにしなくてはなりません。古代ローマでは、市民の命を救った人物に特別な敬意を払うのが習わしとなっていました。人々を死から守る人にいくら敬意を払っても払い過ぎることはありません。健康を阻害す

1) ホラティウス『書簡詩』1.19.6

2) 4月23日はアン女王の即位の日だった。

3) 看板の監督官については、第28号参照。

4) 呼び売り商人であるパイ売りのコリー・モリー・パフについては、第251号参照。

5) この頃、ロンドンには低料金（1回2シリング6ペンス）で往診してくれる医者がいた。

るものも、死を防ぐ人々も、貴殿が注意を払って当然なことです。貴殿にそのあたりのことを明快に指摘して頂きたいものと考えます。その点では、ワインを販売する人たち全員に誓いを立てさせることが公共のためになる、と私は考えます。四季裁判所の所長は、顧客に販売するワインに混ぜ物をしたワイン商に対しては、(飲酒後1年と1日以内にそれが原因で死亡したことが立証されたら)故意の殺人と見なすとのお触れをだし、陪審員はその過失を認定すべきです。ワインに別のワインを混ぜる、つまり、ポートオウポート⁶⁾にヘレフォードシャーを混ぜていることが立証された場合は、減刑にはなりませんし、「過失殺人」⁷⁾にも充当しません。あるワインを別物と知って販売する人は、当然のことながら、前述の故意殺人罪を負わなくてはなりません。なぜなら、こういったワイン商は、不誠実な混ぜ物をして意識的に違法行為をしたのですから。それゆえ、腕を傷つけ、肺を台無しにすることを目論んでいることが立証されたら、刑罰を免れることはできません。私は法曹学院に席を置いて3年になりますが、これこそが法律であり、法律というものは元来そうあるべきなのです。悪意はそれ自体増大するものですから、軽減措置を講じるべきはありません。おそらく、別個には無害だけれども、混ぜ合わせると有害になるとされる酒を造って、人の生命を弄ぶ人たちの残忍性はもちろん、不正行為に対して、いくら厳格に対処してもし過ぎることはありません。食事の時の安全性を保証し、警戒心を追い払ってくれるブルック&ヘリアーは、ロンドン中の人々に引き立てられ、感謝されてしかるべきです。人々にその恩義を思い出させるのは貴殿に課せられた義務です。

敬具

トム・ポトル

観察者殿

私は長い間大学に閉じこもり、数多くの読書をしましたが、ほとんど人と顔を会わせたことの無い人物です。そこで、世の中のことは、先生とか地図で教わる以上のことは知りません。私はこうして勉強には精を出しましたが、人とのお付き合いが苦手になりました。概して死者との付き合いをすることで、生きている人たちとの付き合いが不向きになったといえます。長期間に渡る監禁状態で、私はお付き合いに対して、手に負えない嫌悪感が身に付き、心の中では苦痛を覚えますし、他人に接していても一切楽しくありませんでした。やっと、自分の欠陥をある程度気づくようになり、書物以外には話し掛けられることも話すこともないという屈辱感を覚えたため、私は無理やり人々の中に入り込んでいくことにしました。私は早速最も洗練された人々を探し求めました。そして頻繁に出入りすることで、私の身についていたさびを拭い落としたと考えたのです。人前での振る舞い方をぎこちなく真似をすることで、私は実際の自分よりも立派に見られたいと思うようになりました。

こんな状態のときに、私は熱烈な恋をすることになりました。美しいベリンダに情熱的

6) ポートワインの積み出し港であるポルトガルの港町オポルトに由来する。

7) 「過失殺人」に関しては、第33号参照。

な愛を捧げることになったのです。それがきっかけとなって、私は変わり始めたのです。この情熱のお陰で、これまであらゆることに抱いていた不安や気後れがなくなり、私の関心は彼女にどうしたら喜ばれるかという一点に絞られることになったのです。今では紳士の振舞いを勉強する必要はありません。私の行動の規範となっているのは頭から離れない愛なのです。私の気持ちは自由で寛大になりました。そして、崇拜する人に気に入られないという大望があるために、私の身のこなしには、わがベリンダのように、自由闊達な振舞い方が備わりました。私たちの現状は、彼女が私の情熱に気づいており、私が慎重を期してそれを口にするのを控えているといったところです。これに対して、彼女はとても丁寧に対応してくれ、思慮分別に合致したものとなっています。彼女の歌声はとても魅力的です。彼女は私が愛していることが分かっていますので、私が頼むと即座にそれに応えてくれます。同じ理由から、彼女はダンスの相手も私を選んでくれます。彼女に私の心情を打ち明けるまでには、私の資産状況を改める必要があります。彼女の境遇も私の乏しさを補えるほど十分ではありません。だが、今はベリンダの人柄についてだけお知らせすることにします。情熱が上首尾に終わるといった確信を持つまでにはいたっておりませんが、恋人に対する謝意は十分に伝わってきます。ベリンダは、ともに純真さで飾られた賢明さと分別でもって、いつでも本音を吐露できるといった喜びを抑制しています。彼女を崇拜する男は大勢いますが、彼女の対応は非常に公平で各人の長所に釣り合いのとれたものとなっていますので、断言しますが、私は好敵手たちに嫉妬も憎しみも抱いてはいません。彼女を崇拜する人は誰でも、彼女の素晴らしさを認めていますので、彼女は最適の人を選ぶと信じなくてはならないと思っています。私たち男性の間にある平穏さは、自分が最適だと思わせる自己愛のせいではないのだという積もりはありません。私が思いますに、この女性の人柄には何か並外れたお手本にすべき点があるのです。私の手紙を活字にしてくださると、私たち幸福な好敵手一同は、大変は喜ばしく思う次第です。

敬具

ウィル・サイモン

第363号 1712年4月26日(土曜日)

【アディソン】

どこを見ても惨たらしい嘆きが、どこを見ても
恐怖と死の姿が数知れず目に入った。(ウェルギリウス)¹⁾

ミルトンはわが始祖たちが与えられていた戒めに背いたときに生起するさまざまな感情を表現するさい、見事な手腕を発揮しています。彼らは自責の念、恥辱、絶望、悔恨、祈り、そして希望を通じて、徐々に罪悪感を克服してゆき、完全無欠な悔悛へと至るのです。第10巻の結末では、彼らは大地にひれ伏し、地面を涙でうるおします。ここで、ミルトン

1) ウェルギリウス『アイネーイス』2.368-9

は彼らが神が裁きを下されたまさにその場所で悔悟の祈りを捧げたという美しい状況を付け加えたのです。

直ちに彼らは神が自分たちを裁かれたあの場所に引きかえし、
うやうやしく神の御前にひれ伏し、謙虚な気持で自らの罪咎を
告白して許しを乞い、いささかも偽りのない悲しみと柔和な
謙遜のしるしとして悔いた心から迸り出る二人の涙で
地面をうるおし……²⁾

ソフォクレスの悲劇にも同種の美しい箇所があります³⁾。この悲劇において、オイディプスは、両目を突き刺したのち、(わが国の観客にはとても拡張の高い見せ場を提供してくれているのですが) 宮殿の胸壁から飛び降りず、幼児期に過ごしたことがあり、もし両親の意志通りに遂行されていたら、死んでいたはずの場所で死を迎えるために、キタイロンの山に連れて行って欲しいと頼みます。

ミルトンは必ず感情に詩的なひねりを付与しますので、第11巻の冒頭で、聖書の美しい寓意の形式に則り、アダムたちの祈りは受け入れられたのだと描写します。「また、別の御使が出てきて、金の香炉を手を持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった。香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみまえに立ちぼった。」⁵⁾

アダムらの祈りは天に向かって真っ直ぐ飛び上がっていった。
途中、意地の悪い突風に煽られて道を見失ったり、消えて
しまったりすることもなかった。そして物象こそ^{すがた}もなかったが、
天国の扉を通して中へ入り、馥郁たる金の香壇まで来ると、
偉大な仲裁者から香の衣裳を与えられた。この衣裳をまとして、
祈りは遂に父なる神の王座の前に進み出ることができた⁶⁾。

救世主の2度目の仲裁の場合も同じ思考が伺えます。ここでは非常に明確な感情が表現されています⁷⁾。

2) 『失樂園』第10巻1098-1102行。

3) ソフォクレス『オイディプス王』1452-7行。

4) ドライデンとリーによるオイディプスの最後は、ト書きでは「窓から身を投げ、テーベの人たちが彼の遺体の周囲に群がった」となっている。

5) 『ヨハネの黙示録』第8章第3-4節。

6) 『失樂園』第11巻14-20行。

7) 『失樂園』第11巻20-44行。

ミルトンが実に巧みに自らの叙述に取りれている聖書の詩的な箇所を取り上げるとなる
と、エゼキエルが幻となって現われる天使たちに語りかけ、「おのおの四つの顔をもち」
「その輪縁わふち、その輻や、および輪には、まわりに目が満ちていた」⁸⁾と付け加える箇所を無視
するわけにはいきません。

見張の役につく輝ける智天使の一隊も、これに従った。

彼らはいずれも四つの顔をもったヤヌスさながらに

四つの顔をもち、全身にはアルゴスの眼の数よりも

遙かに多数の眼がくまなく鑲められていた⁹⁾。

人間に下される厳粛な宣告を聞くために、集まってくる天の天使たちの様子は、実に生
き生きとした着想で描写されます¹⁰⁾。そこで、全知全能の神は、審判の中で慈悲を忘れな
いように、そしてまた、ミカエルには、すでに罪と惨めさによって打ちのめされて
いる人間が意気沮喪しないように、穏やかに神の宣告を伝えるように命じます。

しかし、たとえ厳然とこの宣告を伝えるにしても、

彼らがこのような悲報を聞いて意気沮喪しないように、

というのは、彼らが和らいだ心をもって涙を流し、

自分たちの罪を嘆き悲しんでいる姿がわたしの眼に

映っているからだ¹¹⁾、

アダムとイヴの対話には感動的な気持がみなぎっています¹²⁾。二人して鬱々とした夜を
過ごして、楽園から出て行くとき、彼らは楽園の東の門の方に逃げてゆく獲物を追い掛け
る鷲と獅子を見つけます¹³⁾。この出来事には二様の美点があります。これは詩にふさわし
い高潔で正当な前触れを呈示するだけでなく、動物創造で引き起こされている敵対感情を
も示しているのです。寓話を気高い驚異で飾るためだけでなく、自然界における同様の変
化を示すために、ミルトンは太陽が欠けるのだと描写します。この特別な出来事は、つぎ
の点で、読者の想像力に同様に素晴らしい効果を発揮します。太陽が欠けているにも関わ
らず、天使たちの一群が群がる西の空に明るい雲がかかり、太陽そのものよりも光り輝い
ているのです。辺り一帯が暗くなって、この光り輝く装置はその輝きと壮大さを見せてい
るのかもしれない。

8) 『エゼキエル書』第1章第6節、第10章第12節。

9) 『失楽園』第11巻127-30行。

10) 『失楽園』第11巻72-83行。

11) 『失楽園』第11巻108-11行。

12) 『失楽園』第11巻141-80行。

13) 『失楽園』第11巻184-90行。

夜が明けて正午にもならないのに、東の空に暗闇が
訪れたのはなぜなのか？ いや、あの西の空に漂う雲の中に
ただならぬ輝きを示す朝の光が射しているのは？
ああ、あの雲から一条の白光が射し、それに乗って何か
神々しいものが静かに降りてくる！
アダムと言ったことは間違いではなかった。碧玉色の空から
天使の群れがまもなく楽園^{パラダイス}にくだってきて、とある山頂に降り
立ったからだ。その姿は……¹⁴⁾

登場させる行為者をつねに適切なものにするミルトンが、わが始祖を楽園から追放するときに、ミカエルにその役目をさせているのは実に適切であることは言うまでもありません。このとき、大天使は天から下ってきた姿ではなく、墮落前のわが父祖を慰めた愛想の良いラファエルのような打ち解けた態度もありませんでした。彼の人柄、態度、振舞いは最高位の天使にふさわしいもので、つぎの一節に見られるように巧みな描写となっています。

大天使はすぐ近くまで来ていた。その姿は天から下った御使というより、いかにもこの世の人間が同じ人間に会うといった装いであった。彼は燦然たる鎧の上から、昔の帝王や英雄が休戦の時に着た紫色の軍衣を纏っていたが、その紫の鮮かさときたらメリボエア産乃至サルラ産の染料による紫の及ぶ所ではなかった。その軍衣の七色に輝く横糸はイリスの染めたものであった。星のように煌めく兜は外されており、その顔には若さの域を脱した血気盛んな男らしさが漲っていた。サタンが恐れた例の剣が、あたかもきらめく黄道帯に懸っていた。そして、その手には槍が握られていた。アダムは恭しく一礼した。大天使は王者の如く威儀を整えたまま、おごそかに己の来意を次のように告げた¹⁵⁾。

楽園から追放されると聞いたときのイヴの訴えは、実に美しいものです。そのときの感情はこの件にふさわしいだけでなく、ここにはとりわけ穏やかで女らしい感情が込められています。

^{パラダイス}

楽園よ、こんな風にして私はお前と別れなければならないのか。

14) 『失楽園』第11巻203-11行。

15) 『失楽園』第11巻238-50行。

おお、私の故里^{ふるさと}よ、お前とも、そして神々の憩いの場ともいえる、
 楽しかった小径よ、木蔭よ、お前たちとも、別れなければならないのか。
 やがては二人とも死ななければならないにしても、あの日以来
 許された猶予の日々を悲しくと安らかにここで過ごすつもりだったのに！
 おお、花よ！ お前たちは他の風土では育つまい。私は朝早くから、
 夜は夜で最後に、お前たちを見廻ったものだった。
 蕾がつけば、そっと優しく育てあげ、名づけ親にもなってやったのに、
 これからは誰が夥しいお前たちの世話をするのであろうか。
 陽に当て、整頓し、あの馨しい泉から汲んだ水^{あずまや}を注ぐのは誰なのだろうか。
 それから、最後に、夫婦の契りを結んだ四阿よ、見るからに美しく、
 また香り高いいろんなもので私はお前を飾ってあげたが、
 そのお前とどうして別れられようか？ ここに比べれば下の方の世界は
 暗く荒れ果てていよう、——私はそのどこへ行ったらよいのか？
 ここの不死の果物を食べなれた私たちは他の場所の汚れた空気を
 どう吸って生きたらよいのか？¹⁶⁾

アダムの話には同様に感動的ではあるが男性的で高揚した思いがみなぎっています。つぎの一節ほど、崇高で詩的なものではありません。

ただ心から残念に思うことは、ここから立ち去れば神の御顔から
 身を隠すことになり、したがって神の聖なる存在に接することが
 できなくなるということです。ここでなら、神がその聖なる存在を
 顕わし給うた場所を次々といく度も訪ねてゆき、礼拝をし、
 自分の子供たちに向かって、この山の上に神が現われ給うたことが
 あるとか、この木の下に立っておられる神の姿が見えたとか、
 この松林の中で私は神の声を聞いたとか、この泉の傍のこの所で
 私は神と語り合ったとか、いろんなことを語って聞かせることが
 できます。そして、その思い出に、或は後世への記念として、
 そういった場所に緑の芝土で美しい祭壇を築き、小川から光沢のある
 石を運んできて積み上げ、その上に香り高い樹脂や果物や花を
 捧げることもできます。しかし、あの下の方に広がっている世界の
 どこへ行けば、神の輝かしい姿が求められ、神の足跡が辿られると
 いうのでしょうか？ 私は、結局呼び戻され、命を延ばしていただき、
 しかもやがて或る事を果たすはずの子孫に恵まれる約束を与えられ
 ましたが、怒り給うた神から一度は逃げた人間です。それでも、

16) 『失樂園』第11巻269-85行。

せめて僅か一端にすぎなくとも神の光輝に輝く裾を仰ぎ、遙か遠くからでも神の足跡を拝むことができれば有難いと思うのです¹⁷⁾。

ミカエルはその後、アダムを楽園の中で最も高い山の頂へ連れて行きます。そして、地球の半分を一望に見渡させ、さまざまな幻を登場させます¹⁸⁾。私は以前に、ミルトンの詩の構想は多くの点で『イーリアス』や『アイネーイス』のそれよりも荘厳だと述べたことがあります。ウェルギリウスの英雄アンキーセスの場合、最後に、彼の子孫たちが全員登場することになります¹⁹⁾。この挿話は『アイネーイス』全編の中でも最も崇高なものの一つとして賞賛されますが、ミルトンの方がはるかに崇高なものとなっているのは誰もが認めるところです。アダムが目に入るものは、特定の種族に限定されずに、全種族に渡ります。

アダムがこうしてすべての息子や娘を見渡すさいに、最初に目にするのはカインとアベルの物語です。この物語の表現は非常に緻密かつ適切なものとなっています²⁰⁾。死を迎える人間を初めて目にしたときに、アダムの心に生じる好奇心と当然の恐怖は非常に感動的です。

それはともかく、今私が見たのが死なのでしょうか？
 こんな風にして私は元の塵に帰ってゆくのでしょうか？
 なんと恐ろしい光景！ 見るからに醜悪で、考えただけでも
 凄惨で、身震いするような感じがします！²¹⁾

アダムが目にする第二の幻は、実にさまざまな姿をまとった死のイメージです²²⁾。ミカエルは、アダムが彼の罪が彼の子孫にもたらした結果の概観を知らせるために、あらゆる種類の死に至る病を抱えた人たちがあふれている大きな病院、つまり、癲病院を呈示します。ミルトンは前回述べたような架空の人物を適確に利用することによって長引く不治の病に苦しむ病人たちを見事に描きます。

病人達の七転八倒するさまは凄絶をきわめ、その呻き声は
 陰惨そのものであった。「絶望」が忙しそうに病床から病床へと
 駆けずり廻って病人を看ていた。「死」が病人達の枕もとで
 意気揚々とその槍をふり廻していた。病人達はその一撃を

17) 『失樂園』第11巻315-33行。

18) 『失樂園』第11巻376-411行。

19) ウェルギリウス『アイネーイス』6.756-885

20) 『失樂園』第11巻429-47行。

21) 『失樂園』第11巻462-5行。

22) 『失樂園』第11巻477-93行。

何よりの贈物、最後の望み、としてしきりに哀願し、求めたが、
「死」は一向にそれに応じようとしなかった²³⁾。

このとき、アダムに生じる感情は同様に、ごく自然なものです。

このような残酷な光景を見たらどんな石のような心の持主でも
涙なきをえないであろう。女からこそ生まれてはいなかったが、
さすがのアダムも堪えきれずに泣いた。彼の男らしさも
惻隱の情に負け、しばし涙にかきくれた²⁴⁾。

その後のミカエルとアダムの対話には高尚な教訓が満ちています²⁵⁾。

詩においては、出来事の対比ほど喜びを与えてくれるものではありませんので、こういった陰惨な死と病気を見せた後で、ミルトンは陽気と愛と愉快に満ちた場面を用意します²⁶⁾。
この幻に吸いつけられるのですが、アダムの心に忍び込む密かな喜びは、とても繊細に描かれます。私としては、聖書でいう神の子たちを誘惑する淫らな女たちの一団の描写を無視するわけにはいきません。

お前が見た、先ほどの美しい女の群れがそれだ。彼女たちは
快活で柔和で華やかで、あたかも女神のように見えたかもしれないが、
事実は、家庭の務めや貞淑さといった女として何よりも大切な
美德を全くもってはいなかった。それどころか、情欲の楽しみに
耽溺し、歌い、踊り、装い、蝶々と喋り、嫣然と秋波を送る、——
そういったことだけを仕込まれて大人になった女たちだった。
神の子らと呼ばれたほど敬虔な生活をおくっていたあの謹厳で
真面目な男たちが、それまでもっていたすべての徳もすべての
名誉もかなぐり捨てて愚劣千万にも屈服した相手が実は彼女たちだった。
つまりあの男たちは美しい無神論者の妖しげな欺瞞と微笑に屈し、
悦楽に溺れ（そしてやがて文字通り溺れるはずだ）、笑い痴れたと
いうわけだ²⁷⁾。

つぎに現われる幻はこれとは全く正反対のもので、戦争の恐怖が充満しています²⁸⁾。そ

23) 『失樂園』第11巻489-93行。

24) 『失樂園』第11巻494-7行。

25) 『失樂園』第11巻500-55行。

26) 『失樂園』第11巻580-97行。

27) 『失樂園』第11巻614-25行。

28) 『失樂園』第11巻638-73行。

れを目にしたアダムは涙を流し、つぎの激しい科白を發します。

ああ、この連中はいったい何者なのでしょう、人間でなく、
まさに死の使者と呼ぶにふさわしいこの連中は？
ああ、かくも非人間的に人間に死を齎し、自分の弟を殺したあの男の
罪を幾千倍幾万倍にするとはい！ 彼らがこのように虐殺している相手は、
要するに自分たちの同胞ではないでしょうか？²⁹⁾

ミルトンは、幻に心地よい変化を与え続けるために、戦争の描写にふさわしい恐怖に対するいくつかの観念を読者の心に引き起こした後で、もっと柔和な勝利と祝祭のイメージへと向かいます。これらは大洪水の先触れとなるみだらと奢侈の幻の形をとっています³⁰⁾。

ミルトンがオウィディウスの大洪水の記述³¹⁾に注目しているのは明らかですので、読者はミルトンが多大な判断力を發揮して、ラテンの詩人の冗長で幼稚な表現はすべて避けていることに気づかれるかもしれません。ミルトンの場合は、狼が羊の群れにまじって泳ぐ³²⁾ことはありませんし、セネカが大洪水にはふさわしくないとして非難した気まぐれな想像力³³⁾も發揮されていません。もしわれらの詩人が、オウィディウスの「見渡す限り大海で、しかも岸のない大海」という詩行の真似をしていたとしても、彼は批評家たちが非難する観点からは構想していなかったのです。オウィディウスの後半部は根拠がなく不必要なものです³⁴⁾、ミルトンの場合は自然でかつ美しいものとなっています。

すでに、海も陸地も、見分けがつかなくなった。見渡すかぎり、
大海であった。しかも、岸のない大海であった。(オウィディウス)³⁵⁾

海が、——そうだ、岸辺を失った海が、
海を一面に蔽っていた。(ミルトン)³⁶⁾

ミルトンでは、この描写の前半部が後半部を妨げることはありません。「山羊が草を食あざらしんでいたところで、海豹がたむろしていた」³⁷⁾というオウィディウスよりも、ミルトンのつぎの箇所の方がはるかに卓越しており、莊嚴です。

29) 『失樂園』第11巻675-80行。

30) 『失樂園』第11巻712-18行。

31) オウィディウス『変身物語』1.260-312

32) オウィディウス『変身物語』1.304

33) セネカ(小)『自然論』3.27

34) カウリーが、後半部は「不必要」で、「馬鹿げている」とまで言っている。

35) オウィディウス『変身物語』1.291-2

36) 『失樂園』第11巻749-50行。

37) オウィディウス『変身物語』1.299-300

つい先頃まで栄耀栄華をきわめていた宮殿も、今では
海の怪物の巢窟となり、盛んに子が産まれていた³⁸⁾。

読者は大洪水に関するラテンとイギリスの描写には、わが国の詩人の方が優位に立つ同様な箇所はほかにもいくつかお気づきになられるかもしれません。「大空に雲という雲が集まってくるとか、雨が勢いよく降り始めるとか、大海が浮き上がるとか」³⁹⁾、「虹がかかる」⁴⁰⁾といった描写は、誰もが気づく箇所に違いありません。楽園の状況に関しては実に見事な想像力が発揮されており、幾多の学識ある著者が評価するものとなっていますので、私としても本紙に引用しないで済ますわけには行きません。

そうなれば、この楽園も、いやこの山も、激しい怒濤の
ために土台から押し流され、^{つの}角状に次々と分岐してゆく
奔流に翻弄され、運ばれてゆく。緑という緑は色褪せ、
木という木は波に漂い、一切が巨大な河の激流に吞まれて
下流へ下流へと流され、やがて口を大きく開いた湾へと
たどりつく。かくしてこの楽園は、そこで根をおろし、海潮
に洗われる荒涼たる孤島と化し、^{あざらし}海豹や^{すみか}鯨や鳴き喚く^{すみか}鴟の棲地と
なる⁴¹⁾。

大洪水の幻から大洪水が誘引となってアダムの心に浮かんだ懸念へと移行してゆく様子は、とても優美で、最初の思いはどちらかといえば、オウィディウス的ですが、ウェルギリウスにならったものです。

それにしても、アダムよ、人類の絶滅というか、とにかく
自分の子孫すべてが死に絶えてゆく、しかも悲惨な様相を呈して
死に絶えてゆく、その様を見て、お前はいかに嘆き悲しんだことか！
そして、子孫たちが溺れたように、お前もまたもうひとつ別な洪水に、
——そうだ、なんという激しい悲嘆の涙の洪水に溺れ、沈んだことか！
だが、お前は天使に優しく助け起され、辛うじて立ち上がりはしたものの、
あたかも目の前で子供全部が一時に殺されるのを見て悲嘆にくれる
父親さながらに、まだ呆然と悲しんでいた⁴²⁾。

38) 『失楽園』第11巻750-2行。

39) 『失楽園』第11巻738-50行。

40) 『失楽園』第11巻865-7行。

41) 『失楽園』第11巻829-35行。

42) 『失楽園』第11巻754-61行。

私は第11巻からの引用はことのほか念入りに行いました。なぜなら、一般的には、全編を通じて第11巻は最も卓越した巻とは考えられていないからです。そのため、読者は往々にして賞賛されてしかるべき多くの箇所を見落としてしまう傾向があります⁴³⁾。実際には、第11巻と第12巻は、わが始祖の楽園からの追放というただ一つの状況を基に組み立てられています。これはそれ自体、先行する大半の巻のテーマほど崇高なテーマではありませんが、いろいろ驚くべき出来事や魅力的な挿話がちりばめられていますので、この最後の2巻を『失楽園』に不釣り合いな巻と見なすなんてことはとんでもないことなのです。さらに付け加えておかなくてはなりませんが、もしミルトンが楽園から追放されたわが始祖を描写していなかったら、人間の墮落は完結していなかったでしょうし、その結果、アダムの行為も不完全なものとなっていたに違いありません。

第364号 1712年4月28日（月曜日）

【スタイル】

私たちは幸福を追い求めて、馬に乗り船に乗る。(ホラティウス)¹⁾

観察者殿²⁾

私が敬意を払うあまり、軽率な行いをしていると心の休まらないそんな知り合いの婦人が、つぎのような悩みを引き起こしています。この婦人は未亡人となっていますが、優しい夫は彼女を甘やかし、お気に入りの莫大な財産と16歳くらいの息子の管理を任せられたのです。この息子の素質は際立っているわけでもなく、見下げるほどのものでもなく、平均的なもので、一般的な勉強も年齢なりにまづまづこなしてきました。同時に、この息子はいわゆる早熟な若者です。すべてを糊塗してくれるこの早熟さのお陰で、彼は習得した知識を最大限に活用することができ、あらゆる機会にそれを存分に発揮します。昨夏、二度、三度にわたり、彼は近隣の婦人たちの面前で、教区司祭を戸惑わせたのです。その結果、周りの人たちから、注目を浴びることになりました。こういった説得力のある事情が、頻繁に発生するものですから、母親は息子が偉大な学者になるものと思い込んでしまいます。そして、その他大勢と同じありふれた教育を受けさせていると、才能を挫折させ、素晴らしい能力に取り返しのつかない傷をつけてしまうと考えるようになったのです。

先週、私はたまたま彼女の家を訪れる機会がありました。いつもは同席して取り仕切っているお茶の席に、息子さんの姿が見えませんでした。これは異例なことですから、息子さんはどうされているのかと尋ねたのです。すると、息子はお手伝いさんと一緒に、身の回り品の準備をするために外出しているのですと婦人が応じました。すぐにでも旅に連れて行くとのことでした。私はその奇異な言い方に少し驚きましたが、すぐに気を取り直し

43) アディソンはデニスのことを想定しているのかもしれない。デニス第1巻から第8巻は神の御業を示し、第9巻以降は、墮落した人間の所業を示していると語った。(フッカー編『批評集』1.351)

1) ホラティウス『書簡詩』1.11.28-29

2) この手紙の筆者は、後のハードウィック伯爵フィリップ・ヨーク。

て、この夏、息子さんがまだ行ったことのない田舎の地所を見せるために連れて行かれる積もりなのかと尋ねました。すると、彼女は直ちにそれを否定し、事の次第をすべて打ち明けてくれました。彼女は息子の驚くべき成長、あらゆる学問に対する幅広い知識について事細かに話し、今こそ、息子に人々や物事を学ばせる絶好のチャンスなのだと締め括るのです。彼にフランスとイタリアへのツアーをさせる決断をしたとのことでした。ただし、彼がいなくなることには耐えられないので、自分が同行するとのことでした。

私は彼女の法外な決断を励ます積もりでしたが、この上なく微妙な扱いを必要とする問題に口を挟む気になれませんでした。息子さんの能力や母親の決断に重くのしかかるようなことを口にすることを恐れたのです。要するに、これは微妙な問題ですので、理性の力があっても、口を挟んでしまいますと、奥方を説得するどころか、奥方に冷遇されるのが落ちだと考えたからです。それゆえ、私は直ちにこの一件はすべて観察者殿にお任せすることにした次第です。

私の習性となっているのですが、夜その日の出来事に思いを馳せたとき、息子を母親が、しかも人々と物事を学ばせるという口実で旅に連れて出るという考えは異常であり、愚行だと思わざるを得ませんでした。私の知る限り、これと似たようなことはいくらか思い当たるものの、類例には遭遇したことはありません。そういう訳で、私は、今では教育の一環となっているツアー全般について考えて見ることにしました。若者を文法の勉強とおはじき遊び³⁾から連れ出して、年間30ポンドの報酬とわずかな食糧と引き換えに、国外に出たいと考えている気の毒な先生の後見を受けて、めそめそ泣いている若者を外国に送り込むことは頻繁に行われています。こうして、若者は、人形芝居を見る子供たち同様、実にさまざまな未知の事物を口を大きく開けてじっと見つめることになります。これは、事物の理屈も意味も理解する教育を受けていない若者にとって不思議に映って当然です。だが一方で、こういった若者には、あらかじめしっかりした知識の基礎を与え、理に適った教育を施し、将来を見据えた真つ当なルールを授けてあげるべきなのです。

人々が誰の目にも明らかなミスを犯すさまを考えてみると驚くべきことが分かります。これは幅広い領域に渡り、当然、活発な才能を発揮することになります。私の記憶では貴殿はまだこの件について触れておられません。お願いですから、貴殿から、人々に、ツアーは若者の教育の最終段階で行うものだということを理解させてあげてください。旅に出るためには、人生の終着点がどこかということから始めるべきです。

外国を訪問する真の目的は、風俗習慣を見聞し、自国と比べてどの点が優れているか、また、どの点が劣っているかを観察することにあるのは間違いのないところです。そしてまた、私たちのマナーの奇異な点を知り、外国の人と自由かつわけへだてのない交際をすることで思い知らされる厄介な頑なさとかわざとらしさといったものを払拭することにあるのです。だが、母国の風俗習慣には無知で、まだマナーや振る舞いの基本が定まってい

3) 「おはじき」の原文は Taw。OED には、この語の初出として、He is hiding or hoarding his Taws and Marbles. (1709, タトラー30号) の例文をあげている。

ない人は、こういったメリットを獲得することはできません。これを得ようと努力することは、まさに土台のない派手な建物を建てることであり、要するに、こういった言い方が許されるとすれば、クモの巣に立派な刺繍を施すことにほかならないのです。

念頭に置くべきツアーのもう一つの目的は、古代の著名な著者が暮らし、執筆した場所を目にすることで私たちの審美眼に磨きをかけることにあります。つまり、その国のありのままの姿と著者の描写を比較し、どれだけ原物と一致しているかを観察することにあるのです。これは、きちんと向き合えば、確実に頭脳にとって非常に魅力的な体操となるに違いありません。さらに、時と非人道的行為が歴史的に異彩を放つ多くの場所、都市、国に齎した破壊的な変化から、人間の所業の不確かさについて正当な結論を導き出せる能力のある人なら、徳性を高めるために、相当役立つかもしれません。そして、有名な行為の現場として名高い場所を見聞したり、カトーやキケロやブルータスなどの高潔な人物の足跡を記憶に留めたりすることで、かなり大きな効果があがります。こういった一つ一つの事物を間近で見ることによって、たとえそれ自体小さく取るに足らないものであっても、しっかり印象付けられると、さらに強力に高潔な心が揺さぶられ、彼らの美德に張り合い、彼らの輝かしいお手本を模倣したくなるものです。だが、古代の人たちの精神を理解するにほど遠い人たちはその言語を正確に理解できないものと思います。

ところで、可能ならば、貴殿に溺愛する母親とその息子がヨーロッパの非常に洗練された国で愚かな見世物にならないようにして貰いたいとの私の目的から脱線してしまいました。船酔いをしたり、異国の乗合馬車でごたまぜを経験したりすることは健康のためにはいいことかも知れませんが、若い無知な頭脳はめまいを起こし、往々にして生涯に渡ってその状態が続くことになってしまう可能性があることを、どうか彼らに教えてあげてください。何卒よろしくお願い致します。

敬具

本国育ちのフィリップより

バーチン・レインにて⁴⁾

前略

小生は先週日曜日に結婚式を挙げ、安らかな眠りにつきました。だが、驚いたことに、翌朝、物凄いドラムの音で目が覚めたのでした⁵⁾。この戦争のような音は、小生にはそう思えるのですが、結婚の調べにはふさわしくなく、腹立たしいことこの上ありません。結婚の喜びははかなく、すぐに口論や仲違いになるのだとほのめかしているように思えます。ドラムの音は多くの結婚にとって縁起のいいことではなく、時には、蜜月期間での闘いの前触れになるのではと危惧する次第です。貴殿に同意して頂けますと、ドラムの音は静ま

4) バーチン・レインは、コーンヒルの南からロンバード・ストリートにかけての短い通り。王立取引所のやや東にあたる。

5) ミッソンによると、朝方、新婚夫婦の家の前まで押しかけて行って、ドラムをたたいたり、フィドルを弾いたりして、小銭を貰うまで立ち去らない連中がいたとのこと。

るかもしれません。そういう訳ですので、これを沈黙させ、今後は初夜の明けた朝には静かな曲だけにして貰えるようにしていただけないか。そうすると、これから先結婚する人々は大いに助かるものと思います。

草々
新郎ロビンより

観察者様

私は陽気な女性たちからはお堅い方と呼ばれている女性です。だが、彼女たちに私はそんなからかいの言葉は一切気にしていないことをお見せするために、彼女たちのことは今月28日月曜日にポーター夫人が演じる『好色な未亡人』またの名を『浮気な妻』でお目にかかれて嬉しく思うのです⁶⁾。はっきり申し上げることができますが、私は彼女たちの真似をしたいとはこれっぽっちも思いませんが、好色な未亡人、浮気な妻を見て笑うことができます。これはほかの身持ちの悪い人を見ても同じことなのです。ポーター夫人に備わっていると思われるハーマイオニの高潔な気持と気高い情熱に対する素晴らしい感覚を見ていると大いに笑いを誘われるのでした。私は陽気さにある種の厳格さが備わっていない芝居はあまり好まないのですが、ポーター夫人の演技を見ていると⁷⁾、彼女に代わって私が登場していると思えるのです。陽気な女性たちの行為を理性と権威によって支配しているふりをしている人々には、この厳格さをお勧めすべきです。

草々
アルタミラ

第365号 1712年4月29日（火曜日）

【バジェル】

春の訪れとともに、彼らにも穏やかな暖かさが戻って来る。

(ウエルギリウス)¹⁾

『メナギジーナ』²⁾の著者は、つぎのように記しています。ある日、貴婦人たちと大地とそこに住む人々に快適な暖かさを注ぎ込んでくれる五月の効力について話をしているとき、その中の一人S侯爵夫人が、彼に向かって、自分はその他の月には操正しくしていることができるのですが、五月はそうはいかないと言ったとのこと。そこで、五月が目の前に迫っている今、私としては、本紙を女性たちへの警告として公表し、彼女たちが間

6) トマス・ベタートンの喜劇。1670年頃、リンカーンズ・イン・フィールド劇場で初演され、ドゥルーリー・レイン劇場では、1711年と1712年に3度上演された。

7) ポーター夫人が、3月17日、ドゥルーリー・レイン劇場で『悩める母』のハーマイオニ役を演じた。

1) ウエルギリウス『農耕詩』3.272

2) バジェルは急いで書き写したために、これはS侯爵夫人ではなく、彼女の母親であることに気づかなかった。

違いを犯したとしても、警告が間に合わなかったのだとの口実を与えないようにしたいと考えた次第です。

上記の意見はわが国とフランスの気候が似通っていること、さらには、わが国の貴婦人たちの中にはこのフランスの侯爵夫人と似通った気質を持った人がいることを考慮したものと考えられます。

こういった傾向がどういうわけで年一度訪れるのか、冬の寒さで硬直した気持ちが春になってゆるんだために、さ迷い出るためなのか、野原や牧草地の陽気な眺めが、鳥たちの求愛活動とあいまって、自然に人々の心をくつろがせるためなのか、はたまた、幾人かが想像するように、女性はある種の本能によって花床に身を投げ出したくなるためなのか、といったことは医師の判断に委ねたいと思います。とにかくその原因が何であれ、この五月という月が、包み隠さず行動に移す女性たちに大きな影響を与えているのは誰の目にも明らかです。田舎の教区の娘たちが、私はそうは思いませんが、学識あるとある好古家が異教の儀式の名残と考えているメイポール（五月柱）を囲んで踊るのを目にするのもこの時のことです。

同様に、頬の赤い乳絞り女たちが、まるで後援者たちが用意した豪華な装飾で圧死した処女タルペイア³⁾のごとく、ピラミッド型に積み上げた銀製の大型ジョッキを前にして汗を流すのも5月1日のことです。

これもまたこの陽気な季節に特有のグリーンガウンという儀式⁴⁾については述べる必要はありません。

同じように周期的に起こる愛情の激発は、ドライデン氏がこの陽気な月について述べるように、女性全体に広まっています。

甘美な月は、森に緑のお仕着せを着させ、
最初ではないにしても、1年のうちで最も美しく、
美の女神たちがダンスの時間へと誘ってくれ、
自然の絵筆が花々に彩色を施す。
活発な5月は若者たちに徹夜させ、眠らせない。
彼女の柔らかな息吹が暖かく降り注ぎ、
新たな情熱を与え、消えた愛を蘇らすのだ⁵⁾。

そこで、この温暖な季節を描いた優れた画家たちの作品には、西風の神ゼフェルスに戸

3) タルペイアはローマを裏切って、サビーニ族のために城門を開けたが、報酬を求めて逆に殺されたウェスタの処女。

4) グリーンガウンの儀式とは、若い女性を草の上に押し倒し、衣服に草の色がついたことからそのように呼ばれた。時には処女の喪失を暗示した。

5) ドライデン『パラモンとアーサイト』Ⅱ.53-56, I.176-9 パラモンとアーサイトは、チョーサーの『カンタベリー物語』『騎士の話』に登場する恋人エメリーをめぐって争うテーベの若者。

惑うキューピッドはあちこちを飛び回っていることになります。私自身の経験からしても、一年のこの時期は、全国各地から数多くのラブライターが寄せられることを付け加えずにはいられません。

直近の郵便で、ヨークシャーの紳士からこれに関わる手紙を頂きました。この紳士はどうやらこの三年間言い寄ったのだがうまくいかないと思われるゼリンダなる人物に不満たらたなのです。彼が言うには、この五月に決着をつける積りであり、目的が達成できなければ、彼女のことは一切諦めるとのことです。

以上、女性たちには、この危険な月にさらされる危険をはっきり忠告しましたので、つぎは、この季節に頻発するカレンチュア（熱射病）⁶⁾の予防方法を定めたいと思います。

第一に、敢えて外出する場合には、必ず両親ないし誰か真面目で思慮分別のある人物を同行することをお勧めします。花咲く野原ではいかに過ちを犯しやすいかは以前に述べた通りですが、ここではプロセルピナが運命的な冒険をしたのは花摘みのときであったことを述べておきたいと思います。これに関して、ミルトンはつぎのように記しています。

プロセルピナが花を摘んでいたとき、それらの花にも
優る美しい花であった彼女自身が暗鬱なデイスの手に
摘みとられたあのエンナの美しい野原も⁷⁾、

引用しましたので、第一のルールについては、ウェルギリウスの若者への助言で締め括りたいと思います。野イチゴや花摘みをしているときには、草むらに潜んでいるヘビに気を付けなさいというのがそれです⁸⁾。

第二に、占星術師たちが五月の暦で述べている「食事は簡素なものとし、適度な瀉血をすべし」⁹⁾といった処方を含めざるを得ません。

節制ということでは、女性の読者の皆さんはロマンスやチョコレートや短篇物語などの刺激物¹⁰⁾に手を出す場合には特に慎重になるように助言したいと思います。私はこのお祭り騒ぎの期間にこういったものを使用するのはとても危険だと考えている次第です。

私としてはひとえに田舎の女性のことを思っただけのことだと明言して来ましたので、女性の皆さんには、決意が鈍り始めたときはいつでも、この甘美な時期はわずか31日のことであり、この月を乗り切りさえすれば後は気楽に過ごせるのだということを肝に銘じておい

6) カレンチュアは熱帯地方を航海するの船乗りが罹ったといわれる病気で、幻覚症状がおき、海が緑の草原に見え、飛び込みたくなったという。

7) 『失樂園』第9巻268-71行。

8) ウェルギリウス『詩選』3.92-93

9) リチャード・ソーングーズ『アポロ・アングリカヌス』（1665）

10) 『ハーリー文庫』（1808）に、コーヒー、ティー、チョコレート、タバコなどの刺激物が感情に大きな影響を与えると記録されている。『ハーリー文庫』は初代オックスフォード伯爵ロバート・ハーリー（1661-1724）が収集した一連の古記録、古書のこと。そのひとつとして、「コーヒー、ティー、チョコレート、タバコの自然誌」（1682）がある。

て頂きたいと思います。町に住む女性の皆さんについては、無邪気な娯楽に興ずるときには用心をするように助言します。どうしても芝居小屋に行かざるを得ない場合には、喜劇よりも悲劇を観に行くようにお勧めします。太陽が双子座にかかっている間は、オペラよりも人形劇の方が安全です。

本日の紙面は、名誉のために自然に戦いを挑む価値があると考えるご婦人方のために書いていることは読者の皆さんにはお分かり頂けるに違いありません。美德を守る価値があるとは考えずに、最初の呼び出しで評判を失ってしまう破廉恥な人々については、こういった注意や警告は無駄になってしまいます。娼婦にとっては、1年中変わりはなく、五月と十二月に差異はないのです。

第366号 1712年4月30日（水曜日）

【スティーラー】

太陽が姿を見せない夏の快活な光線から
かけ離れた遠くの場所へと私を誘う。
愛と妖精ニンフが優しく語りかけ、甘美な笑みを
浮かべて、私の労苦を和らげてくれる。(ホラティウス)¹⁾

恋する人の思いは途方もなく矛盾に満ちたものですので、私はしばしばどうして逆上に駆られた人以上に勝手気ままな振舞いになるのか不思議に思ってきました。だが一方で、この病的な状態は何一つ道徳に敵対することはありません。恋人への献身によって、その人の心には、女性だけでなくあらゆるものに対する大きな愛情が掻き立てられます。この情熱を著述家が表現するときには、一般的には、明らかにくつろいだ気分で、ある種の想像力を駆使することになります。だが、真の審美眼を持った人物には、情愛のこもった心と単に嘆きを物語っているだけの心の区別ができます。この種の仕事で最も馬鹿げているのは、才走ることです。あらゆる感情には必ずきっかけがあり、それぞれの事情にふさわしいものでなくてはなりません。このルールを逸脱しますと、つつましい召使はどんなに立派なことを言っても、恋人に自分の愛情を打ち明けることはできず、自分はこれだけ素晴らしい身なりができるのだと言っているに過ぎなくなります。レースやひだ飾りと人との関係は、機知や機転と情熱の関係と同じなのです。

観察者殿

つぎに掲げる詩は、ラップランドの恋歌の翻訳です。これは私がシュフェールのラップランド史を読んでいて目に留まったものです²⁾。繊細な心があるとは思ってもいなかった地域に、これほど愛情豊かな心があるのを知って、私はうれしい驚きを覚えたのです。こ

1) ホラティウス『頌詩』1.22.17-18, 23-24

2) ジョン・シュフェールの『ラポニア』（フランクフルト、1673）は、アクトン・クリーマーが翻訳して『ラップランド史』（オックスフォード、1674）に出版し、1704年に再版が出た。

れがもっと温暖な地域であれば、たとえまったくの未開地であっても、オレンジの果樹園があり、鳥たちのさえずりを耳する所で、住民たちの間で甘美で熱狂的な調べが歌われていたとしても、私は何ら不思議には思わなかったに違いありません。愛と詩心をささやくラップランドの叙情詩は、古代ギリシアやローマの詩にも匹敵します。1年の大半が氷で覆われ、暗闇に包まれた地から生まれたまぎれもない頌詩なのです。驚くことに、こんな地で貧しい人々が食糧を手に入れ、種の繁殖に努めているのです。正直言って、私にとっては、これは名高いドラムや風や魔法の物語よりも奇跡的なことに思えたのです。

私としては自信を持ってこの北の国の歌を推挙します。なぜなら、何一つ付け加えたり削ったりせずにその感情を正確に維持しており、賞賛に値するのは、私の翻訳ではなく、運送によって被ったかの国の毛皮をなめし、磨いている彼らなのですから。原作の詩脚は、ピンダロス風の韻律を喜ぶわが国のご婦人方の詩脚と同じように、自由で不揃いなものです。そのため、女性たちはおそらくこれは恋人からの心地の良い贈物と思うに違いありません。だが、おそらくもっと奔放な韻律の方がラップランドの言葉には適しているのでしょうが、私は敢えてわが国の言葉にふさわしくように厳密な韻律にしてみました。

この歌の作者は、父親と一緒に住む恋人の家に自由に出入りできずに、遠く離れた野原から彼女の姿を垣間見たいと思っているのだと想像する必要があります。

1

ああ、朝日よ、お前の放つ気持ちのよい光線が、
わが愛しの人を戸外に連れ出し、霧を一掃させ、
空を晴れ渡らせ、彼女を私の目の届くところへ
連れて来てくれる。

2

ああ、わが愛しの人をしっかりと目にすることができるなら、
私は空高く突き出て揺れているあの松の木が一番先の
枝によじ登り、揺られながらいつまでも
じっと見つめているだろう。

3

愛しの荒野よ、君はどこに横たわるのか。
わが眠れる恋人を隠しているのはどんな森なのか。
わが憧れの女性を隠す木々は、私は怒りに駆られて
根こそぎにしてやる。

4

ああ、雲や空の上に乗れたらどんにいいだろう、
それが駄目なら、カラスの羽にまたがれたらいいのに、
お前たち、コウノトリや白鳥よ、しばし留まって、
恋人をふわりと運んで来ておくれ。

5

わが花嫁がわが至福を拒否して久しい、
夏は徒労のうちに瞬く間に過ぎ去ってしまう。
身を切るような冷たい突風も恐くはない、
嵐が来ても夜が来ても私はここから離れはしない。

6

鋼の強さを何にたとえたらよいのか。
ああ、愛は何にもまして強力な足枷だ。
手足は鋼のボルトで拘束されるが、
残酷な愛は心を鎖で縛ってしまう。

7

もはや君の心を悩ますことはない、
思い悩むときは、最初の思いが最善だ。
行くのは狂気で、留まるのは死だ。
さあ、愛しの人のもとへ、急ごう。

観察者様

4月10日

私はお手伝いと呼ばれるさもしい人物の一人で、とてもお気に入りのある女ご主人と暮らし始めてしばらくになります。この生活で私のお仕事と喜びは不可分なものになっています。ご主人様の身の回りのお世話をするのが私の最大の喜びとなっており、実際、ご主人様は社会的地位にふさわしく、不機嫌になられることはめったにございません。だが、ここに私の不満の種があるのです。実は観察者様、ご主人様は何でもかでも私に、与えてしまいなさいとおっしゃるのです。古着はすべて私の手元から取り上げて他人様に与えようとなさいます。屋敷にいる欲しがってもいなく、着ることもない人々に与えてしまうのです。日々屋敷に着飾って出入りする寄宿者に与えることもしばしばです。衣服を欲しがっており、見てくれを大切にしています私にとっては、これはとても悔しいことなのです。そのため、私は今までどおり快活にお仕えできないほど不快な心持になっているのでございます。ご主人様はそのことに気づいておられ、他人様が好まれるのを見ると妬みを覚え不機嫌になられます。ご主人様には妹様がお一人おられ、同じ屋敷に住んでおられます。この方はお姉様と比べると財産ははるかに少ないのですが、絶えずお付のお手伝いさんを引き立てなさるのです。そこで、このお手伝いさんは日曜日になるといつも、ご主人様に頂いた素敵な衣服に身を纏うことができます。私はこれを見ても妬みはしませんが、私の心付けがおべっか使いと私腹を肥やす連中に分配されることは、私にとっていかに落胆させられることかご主人様に少しは分かっていたいただきたいものと思います。ご主人様にはお話するのですが、ほとんど効き目はございません。ご主人様が何も返事してくださらないのならば、いらいらするだけですから、首にしてもらいたいものと思っているくらいです。何卒、観察者様のお力添えをよろしく願います。私は貴方様の助言に全面的に従う所

存でございます。

敬具

コンスタンシア・コウムブラシ

どうかこの手紙に素敵な衣服を着させて日の目を見させてください。貴方様の思索のファンでいらっしゃるご主人様の目に留まりますことを願っています。

第367号 1712年5月1日(木曜日)

【アディソン】

すでに染めることになっているシーツは
使用せずにとっておきなさい。(ユヴェナリス)¹⁾

私はしばしば私の思索によって皆さんに生じる二種類の恩恵を思いやって悦に入っています。この恩恵を論理学者風に表現しますと、「物質」と「形式」になります。形式ということでは、読者の受け取るメリットとしては、私の日々の骨折りによって精神が向上するか、喜びを見出すかのどちらかを挙げることができます。これに関しては、これまで何度も述べてきましたので、今回は前者の物質について考察したいと思います。物質という面では、私の思索によって皆さんに生じる恩恵は、かなりな量の紙を消費し、印刷職人を雇用し、大勢の窮乏した人々に仕事を与えることになっています。

紙を作るには用途のなくなった紙屑を必要とし、ほかに仕事のない人々に紙屑拾いという仕事を提供します。通りでうろうろしているこういった貧しい人々は、それぞれ拾い集めた紙屑を商人のところに持ち込みます。商人はそれをまとめて製紙工場²⁾に運びます。工場では何人かの人たちの手を経て、その紙屑に新たな生命を与えます。自分の地所に工場を所有している人々は、これによって地代を上げ、全国に製品が供給されることになります。そうすることで、それまでは近隣の人たちのお世話になっていた人たちも潤うことになります。

物質が紙になるとすぐに、印刷所に持ち込まれます。そこで、その物質は再び数多くの職人の手に渡り、別の職業に仕事を供給することになります。ここから、ニュースや政治問題で色づけされ、『ポストマン』『ポストボーイ』『デイリー・クーラント』『レビュー』『メドレー』『エグザミナー』といった形で町に出回ることになります³⁾。男も女も子供も

1) ユヴェナリス『諷刺』1.18

2) 「ホワイト・ペーパー会社」が1686年に設立の認可を獲得した。イングランドでは、17世紀末に製紙業が発達した。

3) 『ポストマン』は第1号、『ポストボーイ』は第173号、『デイリー・クーラント』は第12号をそれぞれ参照。デフォアの『フランス情勢についてのウィークリー・レビュー』は、1704年2月19日から1713年6月11日まで続いた。ロバート・ハーリーの穏健的なトーリーの主張を表明した。アン・ボールドウィンが出版販売をした『メドレー』の最初のシリーズは1710年10月5日から1711年8月6日まで週刊で発行された。第二のシリーズは、ベーカーのもとで、1712年3月3日から8月4日まで、週2回のペースで発行された。『メドレー』の執筆者としては、アーサー・マナリング、ジョン・

誰が最初の運搬人になるか先を争います。彼らは新聞を配って日々の暮らしを支えることになります。要するに、紙屑の束が一折れの『スペクテイター』に変わっていく様を辿ってみますと、その全行程のそれぞれの段階でいかに多くの人手を要しているかが分かります。つまり、私が『スペクテイター』を1号出すことで、数多くの人たちの生計を立てていることになっているのです。

聡明な読者の皆さんのことを考えて見ますと、このようにして印刷され発行されるわが新聞はいくつもの点で人々のためになっているとおっしゃるに違いありません。実を言いますと、この1年間、私はパイプに火をつけるのもこの新聞を使ってきたのです。私の宿のおかみさんは、幼い娘さんを私のところによこし、『スペクテイター』の古紙を所望させるのです。おかみさんは私にいつもスパイスを包むには古紙が最高なのだと言います。同様に、一度ならず経験したのですが、古紙は羊肉のパイの恰好の台となります。昨年のクリスマスには隣近所の人々は誰もがこれを欲しがったものです。

リンネルの端切れが上述の数名の人たちの手を経ることで生じる変化について考えて見るのもとても愉快なことです。擦り切れてボロボロになった最高級のホランドつまりリンネルは、新たに元のものより美しく真白になり、しばしば手紙の形で里帰りするのです。婦人のスリッパは、恋文に変身し、再度その人の手に戻って来るかもしれません。伊達男は、擦り切れた首巻をかつて鏡に映して見たときよりも、もっと愉快に眺めるかもしれません。要するに、一枚の布切れは数年タオルとかナプキンの務めを果たした後、落ちぶれた状態から立ち直り、王子様の部屋にあるキャビネットの非常に高価な調度品となるかもしれないのです。

ヨーロッパの非常に洗練された国々では、最高の印刷術を目指して互いに競い合ってきました。共和政府だけでなく、専制政府も、人類が生み出したこの上なく立派で有益な技術となるように奨励してきました。誉れを追い求める現在のフランス国王は、とりわけ、この技術を奨励することで名を揚げています。国王自らの費用を使ってルーブルで本の印刷をさせ、その本に絶大な価値を置き、それを外国の君主や大使に贈る最高のプレゼントと考えているほどです⁴⁾。オランダやヴェニスといった共和国に目を転じて見ますと、この点では、最も偉大な君主国諸国の羨望的になっているのが分かります。しばしば話題に上るのは、儀仗の衛士や総督よりも、エルゼヴィルやマヌティウスのことなのです⁵⁾。

現在イングランドで発行されているいくつかの定期刊行物とこの数年の学問への大きな刺激によって、わが国はその功績を誇れるほど輝かしいものとなっています。最近出版されたカエサル語録の新版は、すでに外国の官報に取り上げられており、わが国の出版界の誉

オールドミクソン、アンソニー・ヘンリー、およびスティールがいた。ウィリアム・キング、スウィフト、マンリー夫人たちが出したトーリーの機関紙『エグザミナー』は、1710年8月3日から1714年7月26日まで発行された。

4) ルイ14世が印刷術を奨励したことが知られていた。

5) エルゼヴィル（1540? -1617）はオランダの印刷・出版業者。マヌティウス（1450-1515）はイタリアの印刷業者・古典学者でイタリック字体を始めて使用したといわれる。

れとなっています⁶⁾。版が正確無比であることに不思議はありません。現代が生み出したこの上なく周到で学識がある賢明な著者たちが目を通してからです。紙、文字、さらにはこれに施されているカットの美しさによって、これは私がこれまでに目にした最も素晴らしい本となっています。そしてまた、これはわが国にその才がある実例であり、最も優れたものとは言えないまでも、他国に抜きん出たものになっていると言えるに違いありません。この著者が非常に優れたわが国の印刷所の出身であることが、私にとってはとりわけ嬉しく思われます。まさしく、この著者がわが国の威厳を保ってくれる一人者であるわけです。

もしそういった人がいるとすればの話ですが、教養のないわが読者は私が国の榮譽としての学問、人々に名声を与える技術としての印刷について語るのを聞かれますと驚かれるに違いありません。強欲と功名心に囚われてしまいますと、それに関心のある人々に大きな力とか利益を齎さない限り、何事も卓越しているとか貴重であるとは思えないものです。私としては、ゴート族とかヴァンダル族のようなことを述べて、『スペクテイター』の品性を落としたくありませんので、どうしようもなく愚かで無知なその種の人々に対しては憐憫の情を持って見るしかありません。

第368号 1712年5月2日(金曜日)

【スティール】

子供が生まれたときは、その行く末の苦難を哀れんで嘆く
のが義務だ。だが、死の腕に抱かれ、憂き世の勤めが終わる
ときは、友が安らかな眠りにつくのを見て喜ぶべきだ。(キケロ)¹⁾

他紙があくせくとした政治的なニュースを扱っているのに対して、どちらかと言えば、本紙はありのままのこの世のニュースを扱っていますので、この町に住むある著名なフランス紳士にパリから送られて来たつぎの手紙を翻訳して掲載したいと思います。この手紙をお読みいただくと、忍耐と寛大さのお手本である女主人公の死の様子が分かりいただけます²⁾。

拝啓

1712年4月18日、パリにて

貴殿が国を出て行かれて大変な年月が流れましたので、貴殿に最も近い関係の人たちにとっては、貴殿は赤の他人ですので、私としてはそんな語り口をしたいと思います。この機会を捉えて、マダム・ド・ヴィラセルフの死について報告します。彼女の死については、

6) この本は神学者・哲学者であったサミュエル・クラーク博士(1676-1729)が編集し、ジェイコブ・トンソン(1656?-1736)が出版した。トンソンはドライデンの作品やロウ編集の『シェイクスピア全集』などを出版した。

1) キケロ『トウスクルム叢談』1.48.115 エウリピデス『クレスフォンテ』

2) この悲劇は、『プリティッシュ・マーキュリー』(1712年4月23日)に登場する。

彼女の人生には望ましいこと嘆かわしいことが相半ばしていましたので、貴殿のような人生観の持ち主がこれを不幸であると考えられるのか幸福であると考えられるのかは、私には分かりません。彼女の一生は健康に恵まれ幸福でしたし、精神状態は終始変わらぬ冷静で寛大な心の持ち主として知られていました。彼女は、今月10日、気分がすぐれなくなり、部屋に閉じこもりました。症状は軽く、病床に臥すほどのことではないとはいえ、ベッドを離れることはできませんでした。よく知られていることですが、数年前に、パリで名を揚げている外科医の一人フェストー氏がこの夫人と熱烈な恋に落ちたのでした。彼女は自らの身分を意識し、同時に彼の情熱を考慮して、いかなる申込みよりも自分の立場を重視することにしました。だが、女性というものは心から崇拝している人に心を配るものですから、彼女は医者から血を抜くようにとの助言を受けたとき、フェストー氏のことを思い浮かべたのです。私はそのとき偶々その場に居合わせました。私の近い親戚が特別扱いをして私を同席させてくれたのです。彼女の腕をたくし上げ、血管を浮き上がらせるために、腕を押し始めるとすぐに、フェストー氏の顔色が変化しました。彼が突然脅えているのが分かりました。それを見て不安に駆られた私は、失礼を省みずいここに話しかけました。彼女は微笑んで、フェストー氏が私を傷つける気はないのは分かっていますと言いました。フェストー氏も気を取り直しているように見え、微笑みながら治療を続けました。手術が終わるや否や、彼は自分ほど不幸な男はこの世にいないと大きな声を上げました。静脈の代わりに動脈を切ってしまったと言うのです。この医師の注意散漫、夫人の沈着冷静さについてあれこれ言うことは到底不可能です。事細かな事情については詳述しませんが、3日以内に腕を切断する必要に迫られたということだけお知らせしておきます。卑しい人たちとは違って、彼女はそんな彼を大事に扱い、自らの状態を診察する場には必ず彼を同席させ、彼の意見を求めました。いよいよ腕を切断をするという直前に、遺書を作成するようにと指示を出しました。そして、15分ほど一人で過ごした後、可哀想なフェストー氏もその一人でしたが、医師たちに手術を行うようにと申し渡しました。時間がどのくらい掛かったのかは、私には分かりませんが、切断後、明らかにあと一日もたないといった徴候が現れたようです。この間の彼女の振舞いはとても寛大なものでしたので、私はとりわけ、迫って来る死を彼女がどのように受け止めるのか注意をそそられました。そこで、周りの人たちに語ったこと、とくにフェストー氏に何と語りかけたことを、書き留めたのです。その言葉は以下の通りです

「悲痛な表情を浮かべているあなたを見ますと、私は言いようもなく悲しくなります。私は実際には人生のわずらわしさから解放されたのです。それゆえ、死ぬこと自体はまったく頓着していません。私が命を落とすのは、あなたのミスのせいだとは考えていないのです。それどころか、あなたは幸福な不滅の世界への門出を早めてくれたのですから、私からすれば恩人と言えます。これが今回の事故に関する私の考えです。だが、あなたの周りの人たちは、私の死をあなたのせいだと考えるかもしれません。そこで、遺書であなたに遺産を与えるようにしておきました。これでもって、世間の悪意に打ち勝ってもらいたいのです。」

この素晴らしい女性が以上の言葉を投げかけている間、フェストー氏は、お金ではなく、まるで死の宣告を受けているような表情をしていました。マダム・ド・ヴィラセルフの命は翌日の夜8時までのことでした。そして、彼女は大変な苦しみを味わったに違いないのですが、この上なく忍耐強い精神の持ち主でしたので、その時刻に亡くなったというよりは息をするのを止めたと言ったほうがいいかもしれません。不運にも個人的にはこの夫人をご存じない貴殿は、この並外れた人物と縁戚関係にあったことを喜ばしく思われるだけでしょうが、彼女との交際を奪われた私たちは、それほど簡単に私たちの幸せを断念することはできません。容易には彼女のことが忘れられないのです。

敬具

ポール・レグノー

この夫人が自らに起こった不運に対して取った偏見のない態度ほど、高潔な心を示す例はほかには見当たりません。生そのものに対する見方によって、彼女は自責の念に駆られているこの不幸な人物の悔恨の情を無視することができなかったのです。並外れて寛大なこの夫人の普段どおりの振舞いは、人間社会にとって特異なことであるのは間違いのないところです。この卓越さは今わの際に獲得できるものではありませんし、常日頃から終始賞賛に値する振舞いをしていたに違いありません。このことによって、彼女は死を破滅としてではなく、生の完結として見ることができたのです。